聖書の祈りが私の祈りになる（旧約編）

第２章　モーセの祈り②

神のご介入のタイミング

モーセは自分の使命に向かって歩み始めました。人は期待するものです。神からの明確な招きと、必要な能力が与えられているという前向きな確証があれば、約束されたイスラエルの解放は、何のつまずきもなく起こるだろうという期待です。今日、多くの人々は、このような誤った前提を抱く傾向にあります。そして、ある人々は、物事が期待したほどにうまく行かないと、完全に失望してしまい、落ち込んでしまうのです。

しかし、神はそのような状況を、違う目でご覧になっています。**「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。－主の御告げ－ 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い」（イザヤ 55:8-9）。**

即座に解放される、あるいは奇跡的に解放されるという代わりに、モーセは全く逆のものを見出しました。イスラエルの苦難は、良くなるどころかひどくなる一方で、彼自身が人々の不満や怒りを受けるようになったのです。「彼らはパロのところから出て来たとき、彼らを迎えに来ているモーセとアロンに出会った。彼らはふたりに言った。『主があなたがたを見て、さばかれますように。あなたがたはパロやその家臣たちに私たちを憎ませ、私たちを殺すために彼らの手に剣を渡したのです』」（出 5:20-21）。

今日、祈る人々は、しばしばそのような遅れに遭遇します。なぜそのようなことが起こらなければならないのでしょうか。言えることは、そのように意図的な、神による遅れは、時として人間の理解をはるかに超えた、神の知恵を示すものであることを証明するものとなってきた、ということです。

モーセは、理解できない時には祈りました。次の箇所をよく見てみましょう。「それでモーセは主のもとに戻り、そして申し上げた。『主よ。なぜあなたはこの民に害をお与えになるのですか。何のために、私を遣わされたのですか。私がパロのところに行って、あなたの御名によって語ってからこのかた、彼はこの民に害を与えています。それなのにあなたは、あなたの民を少しも救い出そうとはなさいません』」（出 5:22-23）。

神の定めは確実です。ただ、そのタイミングについては、人間の側にしばしば戸惑いを生み出すことがあります。人間としての限界のゆえに、私たちには物事がぼんやりとしか見えず、まずは目の前のものしか見ることができません。しかし神には、物事の全体がはっきりとお見えになっています。多様なものが混ざり合った複合体のようなもの、過去と現在と未来の様々な側面や、人々の多くの行いや反応が錯綜したものがお見えになっているのです。ですから、理にかなわない方だ、あるいは、不正な方だと言って神を責め立てるべきではありません。「全世界をさばくお方は、公義を行うべきではありませんか」（創 18:25）とある通りです。

エジプトがうまくイスラエルに役立つ存在となっていたことも忘れてはなりません。イスラエルが飢饉にあえいでいる時には、食糧を供給してくれました。ヘブライ人であるヨセフをパロ(訳注：あるいはファラオ)の次に高い地位につかせ、栄誉を与えてくれました。イスラエルが成長する余地を与え、神の民を４百年にわたって大切に守ってくれました。もちろん、新しいパロの下では、イスラエルの人々を奴隷にし、無理な苦役を課すことで搾取していたことは確かです。にもかかわらず、神はご自分の民を抑圧する者たちに対して憐れみ深くあられました。神は、その正義のゆえに、悔い改めのための余地を与えておられたのです。神は非常に忍耐強いお方であり、いかなる者であっても滅びることは望んではおられないのです。これは、過去も現在も変わりません(2 ペテロ 3:9 を参照)。

しかし、さばきが永遠に下らないというわけではありません。お定めになった時が来ると、神は行動を起こされるのです。

それで主はモーセに仰せられた。「わたしがパロにしようとしていることは、今にあなたにわかる。すなわち強い手で、彼は彼らを出て行かせる。強い手で、彼はその国から彼らを追い出してしまう。」神はモーセに告げて仰せられた。

「**わたしは主である。**…今わたしは、エジプトが奴隷としているイスラエル人の嘆きを聞いて、わたしの契約を思い起こした。それゆえ、イスラエル人に言え。わたしは主である。わたしはあなたがたをエジプトの苦役の下から連れ出し、労役から救い出す。伸ばした腕と大いなるさばきとによってあなたがたを贖う。わたしはあなたがたを取ってわたしの民とし、わたしはあなたがたの神となる。あなたがたは、わたしがあなたがたの神、主であり、あなたがたをエジプトの苦役の下から連れ出す者であることを知るようになる。(出エジプト記 6:1,2、5-7)

神の時が来ること、その目的が達成されるのを忍耐強く待つというのは、実に困難なことです。悪に取り囲まれると、希望はすぐに萎えてしまうかのように思われます。今そこにある暗闇は、あたかも「陽は二度と昇らない！」と叫び声をあげているようです。モーセは、神に教えられた通りにイスラエルの人々に語りかけました。しかし、「彼らは落胆と激しい労役のためモーセに聞こうとはしなかった」(出 6:9)というのです。

ついに、エジプトの自己中心的な王であるパロは、弁解の余地の無いところにまで追い詰められていました。それまでに何度も、唯一のまことの神を認め、全てを明け渡すことのできる機会は、はっきりと理解できる形で与えられてきており、また、神の力と奇跡を目の当たりにし、モーセの祈りが答えられるのを繰り返し見てきていたにもかかわらずです。

こうしてモーセとアロンはパロのところから出て来た。モーセは、自分がパロに約束したかえるのことについて、主に叫んだ。主はモーセのことばどおりにされたので、かえるは家と庭と畑から死に絶えた。(出エジプト記 8:12-13)

モーセはパロのところから出て行って主に祈った。主はモーセの願ったとおりにされたので、あぶはパロとその家臣およびその民から離れた。一匹も残らなかった。
(出エジプト記 8:30-31、も参照)

ついにパロは、二度と悔い改めることのできないところにまで至ってしまいます。

祈るのに時があり、やがて、二度と祈ることのできない時が訪れるのです。ヨハネはこれを**「死に至る罪」(1ヨハネ5:16)と**呼びました。パロとしもべたちは、死に至る罪を犯してしまい、自らの運命を封印してしまいました。もはやどれほど懇願しようと、聞かれることはありません。

> 「私のところから出て行け。私の顔を二度と見ないように気をつけろ。おまえが私の顔を見たら、その日に、おまえは死ななければならない」(出エ10:28)。

パロは自ら、神の憐れみから離れていってしまったのでした。「モーセは言った。『結構です。私はもう二度とあなたの顔を見ません』」(10:29)

まだ少しでも希望が残っているのなら、祈るべきです。しかし、祈りが応えられるあらゆる可能性が絶たれてしまったなら、後は状況を神にお委ねするしかありません。

質問

1．今日でも信仰生活で抱きやすい誤った前提とは何ですか？　その前提に立っていると、私たちはどのようになりがちですか？　その時、神はどのように状況を見ていますか？

2．神による奇跡的解放を期待していたモーセが直面したことはどんなことでしたか？　なぜそんなことが起こると思いますか？

3．神の定めは確実ですが、人間はそのタイミングにしばしば戸惑います。それはなぜですか？　なぜ神はエジプトをすぐにさばかれなかったのですか？　神が万事を益とするというみことばを、物事は自分の思い通りになると勘違いすることはありませんか？

4．忍耐強く祈り続けるためにはどのような秘訣があると思いますか？　このためにあなたが心がけて実践していることがあれば教えてください。

5．祈るのに時があり、やがて祈ることの出来ない時が訪れると教えらえています。　祈りの機会を見つけ、逃さないためにどうしたらよいですか？

6．今日読んだ個所から、あなたは祈りについてどんなことを教えられましたか？　どんなことを実践したいと思いますか？